

平成23年度「重点研究費」研究成果報告書

申請区分	C	配分額	200,000 円
研究課題	聴覚障害児に対する読み書き能力の評価方法に関する研究		

研究代表者

氏名	所属	職名
澤 隆史	総合教育科学系	准教授

研究分担者

氏名	所属	職名
濱田 豊彦	総合教育科学系	教授

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字)

本研究では、眼球運動を測度として聴覚障害児の読みにおける情報処理過程の特徴を明らかにすること、作文に対する印象評定と使用語彙や文ならびにその誤りと関連を分析することを通じて、聴覚障害児の読み書き評価の新たな方法の開発に向けて基礎的検討を行うことを目的とした。本研究ではこの目的について、(1)受動文の理解時における眼球運動、(2)聾学校児童の作文における自立語使用と特徴の2点について検討した。

(1)については、コンピュータソフトを利用した受動文の理解課題を作成し、大学生5名および小3の定型発達児1名を対象に、反応時間(RT)の測定および課題遂行時の眼球運動について分析した。課題では、ある状況を示す動画を提示した後、文(能動文・受動文)を提示し、その意味が動画と合致するか否かを正誤判断させた。分析の結果、受動文の正答率は能動文よりも低く、またRTも受動文において遅れること、受動文と能動文のいずれにおいてもかき混ぜ操作を行った文で正語順の文よりもRTが遅れること、特に児童では、受動文における正誤判断の誤りが多いことが示された。また眼球運動の結果から、特に正誤判断の誤りが多い文では、文を何度も読み返す様子が見られること、児童の場合は動画における個々の事物に視線が集中しやすいこと等が示された。一方、児童を対象とした場合の眼球運動測定における安定性やソフトウェアの作動性などについてはその検証をさらに進める必要があり、聾学校児童を対象とする場合、課題の改良が必要であることが示唆された。

(2)については、聾学校小学部に在籍する児童の作文116編(約30,000語)を対象として自立語(名詞、動詞、形容詞)を抽出し、学年に応じた語の使用頻度、異なり語数等を分析するとともに、潜在意味解析の手法により意味空間の特徴について探索的な分析を行った。116編の作文から得られた単語間の類似性および、各児童の作文間の類似性について検討し、学年間(低学年-高学年間)における単語の習得状況について比較検討を行った。なお(2)については現在分析を継続中である。

本研究は平成23年度科学研究費応募課題の一部であり、また研究分担者の科学研究費補助金によって一部を実施した。また平成24年度以降は科学研究費補助金による研究の継続が予定されている。特に、本研究で実施した(1)の研究については、課題の修正を行うとともに対象児・者を増やして研究を進めていく予定である。

研究成果発表方法

本研究の成果は、2012年度第50回特殊教育学会にて発表するとともに、本学紀要(総合教育科学系)に投稿する予定である。